

## 雄勝町大須集落の民家の特徴について

## 石巻市雄勝半島における地域の固有性・多様性に基づく集落再生に関する研究 その5

## About the characteristics of a private house of Ogatsu-tyo, Osu village

## Research on the colony reproduction based on the indignity and diversity of the area in the Ishinomaki Ogatsu peninsula #5

奥富大樹<sup>1</sup>, ○田中達也<sup>1</sup>, 小島陽子<sup>2</sup>, 落合正行<sup>3</sup>, 山中新太郎<sup>4</sup>, 佐藤光彦<sup>4</sup>Daiki Okutomi<sup>1</sup>, \*Tatsuya Tanaka<sup>1</sup>, Yoko Kojima<sup>2</sup>, Masayuki Ochiai<sup>3</sup>, Shintaro Yamanaka<sup>4</sup>, Mitsuhiko Sato<sup>4</sup>

## 1. はじめに

前稿で報告した集落調査のなかで、大須の伝統的な民家の特徴を残していると思われる明治5年に建てられた(ヒアリングによる)K邸を取り上げる。

## 2. 配置計画

K邸は大須の海岸から約350mに位置し(前稿図2参照),メインストリートの北側にある。敷地の北側は現在空き地であるが、以前は建物が建っていたことが確認されており、高密度に住宅が密集する地域であった。

敷地はメインストリートより約1.5m低く、敷地の北側に主屋、東側に台所や納戸等を有する昭和53年に増築(ヒアリングによる)された付属屋を配している。またこれらの建物と前面道路の擁壁、隣地の建物に囲まれた中庭を有する。東側増築部分の南端は、長屋門のように一部が空けられており、現在車庫として利用されている。その部分はメインストリートに接続する幅員3m程の道に接道し、中庭を介した玄関へのアプローチにもなっている。

## 3. 主屋の立面構成

主屋は軒高が約4m、最高高さが約5.2mあり、緩やかな屋根勾配で背の高いプロポーションとなっている。

平側の南面は、中庭に面する玄関の脇に窓を連続して配置する。また中2階を有し、中2階の窓には格子が設けられている。この中2階の窓の脇に設けられた戸袋には、波の間に太陽が昇る様の彫刻が施されている。

平側の北面は、桁上端より上方を除きすべて杉板下見板張りで構成されている。桁上端より上方は土壁となっている。桁や大梁は化粧材を施さずにそのまま表され、桁は両妻面よりも外側に伸び、桁に架かる梁も、桁より外側に伸びている。また北側の屋根面には、地元の住民が「そらまど」と呼ぶ天窓が設けられている。「そらまど」は炉が利用されていた当時の排気口を利用したものである(ヒアリングによる)。

妻側の東面は、トタンを外壁仕上げとしている。一方妻側の西面には、当時の架構をみることができ、桁行に大梁を設け、3重に梁を重ねる形式は、桃生地方の特徴とされる。平側の北面同様に、大梁は壁面より外側に伸びている。大梁上端より上方は



図 1.配置図

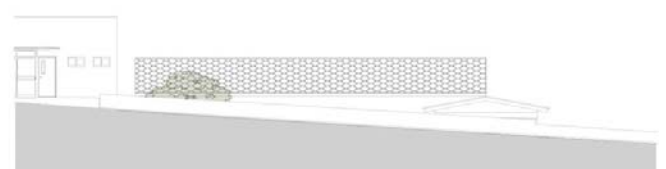


図 2.南側立面図



図 3.東側立面図

土壁となっている。また桁行方向に架けられている大梁は左右対称に配されていない。棟木から左に約三尺の軸線上と、右に約九尺の軸線上に架けられている。

屋根はスレート葺きの切妻屋根であり、両妻面の破風板には、雄勝石で模様が施されている。東側の模様は、2つの半円を引き伸ばした形状を線対称形に配し、それを線対称軸に沿って並べたものである。西側の模様は、鱗の形状を破風板の軸線上に重ねしをとって並べたものであり、両妻面で異なっている。また、母屋と棟木の小口にはスレートで雨よけが設けられている。このようなスレート材による凝った意匠は、この民家の特徴のひとつといえる。

#### 4. 主屋の内部空間

今回の調査では建物内部の実測は行えなかったが、内部にも大須集落の民家の特徴であると思われる構成がみられた。ヒアリング調査時に内部を見学して確認した特筆すべき要素を整理しておきたい。

内部は玄関に直接接続する「茶の間」、その西側の「おかみ」、さらにその奥の「座敷」からなる3間取の構成となっている。調査当時「茶の間」は居間として利用されていたが、昔は土間であった(ヒアリングによる)。「おかみ」には、建具に漆塗りの杉板の一枚戸、南面に神棚や仏壇、収納棚が造り付けられている。成 400mm 以上の長押しより上方に神棚、下方に仏壇と収納棚が配されている。神棚は神体の座所が3ヶ所設けられ、神棚の真中(正中)の神座を第一位として神宮大麻を、向かって右側の神座を第二位として氏神神社の神札を、向かって左側の神座を第三位として家や個人それぞれが崇拝する神社の神札を重ねて奉斎する形式である。<sup>[1]</sup>それぞれの座所には障子が設けられ、欄間は向かって右側と左側が網目状の模様である。真中は格子状の長欄間で、両側より5cm程上方に設けられていることから、ヒエラルキーをつけた

構成といえる。

また天井仕上げは近年張り替えられたため、本来の素材の色を保っていたが、天井面付近の壁は煤で黒くなっていた。これは昔おかみで住民が集まって餅を焼いて食べる慣わしがあったためである(ヒアリングによる)。

「座敷」は寝室等に利用されるプライバシーの高い部屋であると考えられたため、調査は行っていない。

#### 5. まとめ

今回の調査は、主に建物の外構に関する調査であったため、内部に関する情報の確証は得られていない。大須集落における民家の外部の特徴に関しては、下記のことを明らかとなった。

配置計画では、主屋の棟を東西方向とする配置が多く、東側に増築部分を設ける形式が多くみられた。これは民家の形式や大須の生活習慣等に関連する特徴と考えられる。立面では、破風板に施されている模様が両妻面で異なることや、妻面の西側にみられる3重に梁を重ねた架構が特徴であるといえる。

今回は深く調査することができなかったが、主屋の内部空間の架構等も、高台移転地における集落形成を考える上で、重要な研究課題であるといえる。

本研究は、日本大学理工学プロジェクト「東日本大震災復興を契機とした地域の固有性・多様性に応える地域再生と復興住宅等の建築設計に関する研究～宮城県石巻市雄勝町を対象として～」を基に行っている。

#### 6. 参考文献

[1]西牟田崇生：「家庭の祭祀辞典」, pp.64-65, 2005年

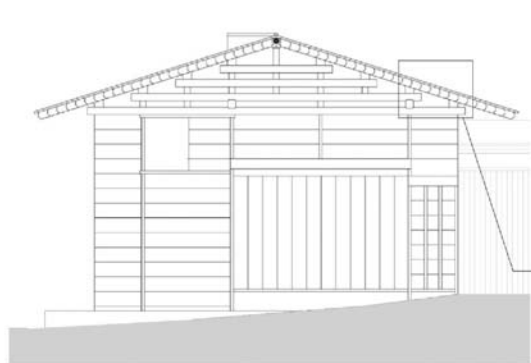


図 4.西側立面図



図 5.東側と西側の破風板の模様の違い



写真 1.造り付けの神棚